

『”熱心”の本質を語る』ヨハネ2：12-22

2:12 そののち、イエスは、その母、兄弟たち、弟子たちと一緒に、カペナウムに下って、幾日かそこにとどまられた。

2:13 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。

2:14 そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、

2:15 なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、

2:16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。

2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。

2:18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。

2:19 イエスは彼らに答えて言われた、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。

2:20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それなのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。

2:21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。

2:22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

●序論

最近インターネット上、特にYouTubeなど動画チャンネルで、多くの異端やカルトが精力的に活動しています。

「自分には縁が無いなあ」などと思わずに聞いていただきたいのです。

カルトは、クリスチャンの好奇心をくすぐる術を知っているからです。

そしてそこには、必ずと言っていいほどその背後に、一部の人たちの私利私欲が露骨に存在しています。肝心の中心となるリーダーたちの目が、聖書をゆがめて自分たちの欲望に向けられているのです。

さて、今日の聖書箇所を目を向ける前に、なぜこういうことを申しあげたのか。ここでも、本当に神に目を向けられているかどうか、信仰者の心の向きどころが問われるようなありさまがあったからです。

礼拝について、ヨハネは、少し後にイエスさまの言葉をこう引用しています。

「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。

そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。

…」(ヨハネ3:23)

LB「大切なのは、…霊的な、真心からの礼拝をしているかどうかの問題なのです」。

●本論

I. 人の備えの落とし穴

この神殿では、各地から来る礼拝者たちのための備えがなされていた。

その始まりは、おそらく礼拝者たちが困らないように備えられたものでした。しかし、その様相はいつのまにか「商売の家」と化していたのです。

2:16 はとを売る人々には「これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな」と言われた。

そこは、異邦人の庭と呼ばれ、ユダヤ人以外の人々が、神殿内のここまでなら入ることがゆるされ、ここでなら礼拝することができるという場所でした。そこでイエスさまははっきり言われました。

ここは、「わたしの父の家である」と。

一見、良い…と思われるそのような備えも、時間がたつと自分の中で、人の欲に覆われてしまう。そんな風になっていました。

求めるべきは「神さまの臨在」でした。

大切なこと、それは、あくまで「霊とまこと」をもって礼拝することです。

ここで、イエスさまを非難したユダヤ人たちの中に、自分たちがこれだけ備えを頑張っているのにという思いもあったかもしれません。

それは確かに礼拝には必要なものです。けれどもだから、貪欲でその礼拝の場を支配していい理由にはなりません。

II. イエスの熱心の向かうところは何？

2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が、わたしを食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。

その熱心は何に向けられいたか、それはまことに「神を礼拝すること」に向けられていました。神殿のあたりまえ。しかし、それが損なわれていました。

詩篇69:9の御言葉を弟子たちが思い起こすありさま。それはその作者ダビデが、神に熱心なゆえに周囲から、辱められた体験を語り、そして預言的に記した言葉です。それはこうも訳し直すことができます。

「神への熱意が、彼の命をも奪うものとなる」

そしてこの「熱心」を、英訳では“My devotion to your house,”、つまり「神の家への『献身』」とありました。

イエスさまは、ここで、ただ怒りに任せた粗暴な暴れ者となっていたのではなく、イエスさまの目は神に向けられていて、その礼拝の聖別に心を燃やしていたのです。

ここで、わたしたちもこの礼拝の備えへの自分自身の心を探られています。

ヨハネ3章(LB)「大切なのは、…霊的な、真心からの礼拝をしているかどうかの問題なのです」。

Ⅲ. しるしへの関心はどこに？

自分たちが与えられた権威で、神殿礼拝を管理し、そこから利得を得ていたユダヤ人たちは、「わたしの父の家を商売の家とするな」と蹴散らしたイエスさまを、そのまま放っておかず迫りました。

2:18 そこで、ユダヤ人はイエスに言った、「こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せてくれますか」。

それに対して、イエスさまは答えました。

2:19 …「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起すであろう」。

2:20 そこで、ユダヤ人たちは言った、「この神殿を建てるのには、四十六年もかかっています。それなのに、あなたは三日のうちに、それを建てるのですか」。

(著者ヨハネは解説します)。

… 2:21 イエスは自分のからだである神殿のことを言われたのである。

そこに来る人たちの礼拝を、自分たちが管理していると自負するユダヤ人たちは、その目に見える神殿の建物しか思い至りませんでした。

それは彼らの誇りそのものでした。それはいいでしょう。

しかし、問われるのは、そこで神さまに目を向けて礼拝しているか？です。

イエスさまの関心は、エルサレムの神殿の建物からは離れて、ご自身の十字架と復活に目を向けていました。

これは、まだイエスさまが宣教を始めてまだ間もない頃の出来事でした。

それでもなお、ご自分の使命を深く思っておられたことが分かります。

それは父なる神さまの御心でした。

そしてそれを、ユダヤ人たちが「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか？」という問いかけへの答えとしたのです。

それは、神さまに向かう「熱心」。まさに「献身」そのものでした。

●おわりに

2:22 それで、イエスが死人の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこう言われたことを思い出して、聖書とイエスのこの言葉とを信じた。

イエスさまは、のちの復活をもってご自分を、新たに立てられる神殿として示されたのです。

そこでは、イエスさまがその恵みによってすべてを備えてくださいます。
イエスさまがいらっしゃるから大丈夫だと。
逆に、イエスさまから離れた礼拝はありません。

私たちは、どんなに自分に不足や過ちがあっても、罪の赦しの十字架と復活を遂げられたイエスさまから礼拝を始めることができるのです。

あの神殿で、弟子たちはイエスさまの語られたことを理解できてはいませんでした。けれども、彼らの礼拝は、建物としての神殿ありきの礼拝ありき、からイエス様ありきへと変えられていたのです。
そこで経験したのです。「霊とまこと」をもって礼拝を。
これから聖餐式を持ちます。
わたしはよく誤解のないようにクリスチャンの方々にご案内します。
みなさんが完璧な備えができた正しい人だから、この聖餐に与ることができるのではありませんと。イエスさまの赦しがあるから、それを記念としてこれを味わうのだと理解を促すのです。

だからここに信仰が必要です。ああ、わたしもこのイエスさまによって赦され、そして神の恵みの契約に与っているのだと。

今ここに臨在されるイエスさまこそ、わたしたちのかけがえのない祝福なのです。